

初恋♥ビフォーアフター

Prologue

——就職活動は、今日で最後！

表面上は落ち着きを保って、しかし内心ではそう強く意気込みながら、籠^{かご}宮^{みや}凛^{りん}は深呼吸をした。
(大丈夫。今日こそ絶対、大丈夫)

本日何度目か分からない自己暗示をかけた凛は、鏡に映る自分を確認する。
駅構内の化粧室の一角。鏡の中には、どこか不安そうな表情の女がいる。

その顔は、とても二十四歳とは思えない疲れ切ったものだった。薄^{うす}ら塗^ぬったファンデーションと色付きリップでかろうじて化粧はしているものの、よくよく見れば目の下には隠^{かく}し切^きれない隈^{くま}があるし、顔色もお世辞にも良いとは言えない。

面接に挑^むむのなら、本当はもう少しはつきり化粧をした方がいいのかもしれない。しかしこれが、今の凛にできる最大のメイクだ。

今どき就活生でも着ないような黒のリクルートスーツは、細身な凛の体形に合っていない上に、薄い生地のアツっぽい代物だ。リサイクルショップでようやく見つけたそれは上下合わせて二千円。値段を考えれば致し方ない。

(口紅くらい、買えば良かったかなあ)

安いプチプラコスメにも可愛いものがたくさんあるのは、もちろん知っている。しかし、ここ一週間、一日一食の日が続いているのだ。口紅なんて買えるはずがなかった。

「あ、そのグロス新色？」

「そうそう。CMのモデルがカッコよくて気になってたの。発色もいいしおススメだよ」

隣に並んだ女性二人組のやりとりに、凜はちらりと視線を向ける。

「外国の男の人ってなんであんなに格好いいんだろう。骨格レベルで違う気がする」

凜より少し年下に見える彼女たちは、綺麗に染めた茶色の髪を、そろってふわりと巻いていた。

ぱっちり施されたメイクはそれぞれとても似合っている。ジェルネイルで彩られた指先が摘むそのグロスは、凜も街頭で流れるCMを見て気になっていたものだ。バッグもブランド物で、恐らく十万円はくだらない。二人の持ち物、服装全てが凜とは真逆だった。

「あの……何か？」

怪訝そうに眉根を寄せる彼女たちの表情に、凜は無意識にそちらを凝視していたことに気づいた。咄嗟に一步後ずさり、言葉を詰まらせる。女性たちは不機嫌な様子を隠そうともせず、凜を上から下まで眺めた後、ふっと嗤った。

「行こ。……だっさ」

去り際に吐き捨てられた言葉は、自分でも思っていたことだ。それでもやはり、他人にはつきりと言われると辛いものがある。

ズキンと響いた胸の痛みにぎゅつとスカートの裾を握るけれど、すぐに手を離れた。皺の寄ったスカートで面接に向かう訳にはいかない。それに彼女たちを見つめてしまったのは、何も羨ましかったからではないのだ。

「……懐かしかった、だけだもの」

ブランド物のバッグ、流行りの化粧品。そんなもの、数年前の凜は数え切れないほど持っていた。(でも、同じものを買おうとしたら、どれくらい働けばいいんだろう)

考えるとぞっとする。以前は値段など気にせず好きだけ購入していたが、もし今お金が手に入ったら、間違ってもブランド品なんて買わないだろう。それより、お腹いっぱい好きな物を食べてみたい。

(美味しいお酒とお肉が食べられたら、他に何もいらないかも)

再度鏡を見る。人と比較した後だからだろうか。自分の姿は、先ほど以上に野暮ったく映った。

「……つと、もう行かなくちゃ」

腕時計の時間を確認すると、十時半。もうすぐ最初の会社の面接の時間だ。

一社目は家族経営の小さな印刷会社の事務。そして二社目は、世界的にも名の知れた外資系企業の総務事務だ。凜の本命は前者の印刷会社。後者については試みに応募してみただけで、履歴書が通ったことに驚いたほどだ。面接を切り抜けられるとは到底思えず、こちらはあまり期待していない。一社目の面接は十一時。面接会場は駅から徒歩十分ほどの場所なので、今から向かえばちょうどいい。

深呼吸をして沈みかけた気持ちを引き上げる。

確かに今の格好はダサイし、野暮^{やぼ}りたい。しかし清潔感はあるはずだ。昔『日本人形みたい』と言われたこともある黒髪はきつちり一つに纏^{まと}めたし、綺麗な姿勢には自信がある。

(連敗記録は、今日で終わり)

大丈夫。今日こそいける——そう自分に言い聞かせて化粧室を出た、その時だった。

「きゃっ！」

「……っと！」

何かにぶつかって倒れそうになったところを正面から抱き留められる。ふわり、と爽^{さわ}やかな香りがした。

「す、すみません！」

眼前の白シャツに顔を押し付ける形になった凛は、慌てて上を向き——息を呑んだ。

——人は、本物の『イケメン』を目の前にすると、言葉も出ないらしい。

今この瞬間、そう確信した。呆^{あっけ}気に取られる凛をのぞき込む大きな瞳は、薄^{うす}ら赤みがかったヘーゼル色をしている。髪は、柔らかそうな栗色。すっと通った鼻筋も形のいい唇も、全てが完璧な造作だ。間近で見る血色の良い滑^{なめ}らかな肌には、染^しみ一つない。

(外国人の人……?)

そうとも見えるし、日本人にも見える。どちらにせよ、こんなに整った顔立ちの男性を見るのは初めてだ。その一方でなぜか見覚えがあるような気がした。

「——大丈夫？」

少し掠^{かす}れて艶^{つや}のある低い声が発したのは、日本語だった。何語で話しかけるべきかと迷っていた凛は、すぐに「ごめんさい！」と頭を下げる。ここ数年で身に着けた九十度の完璧なお辞儀に、男性は驚いたように目を瞬^{しげ}かした後、「顔を上げて」とそつと凛の肩に触れた。

「俺の方こそごめんね。君、痛いところはない？」

男性は凛と視線が合うと、ほつとしたように微笑んだ。そういうば、先ほどの女子大生が言っていたグロスのCMに出ている外国人モデルに似ているかもしれない。

「大丈夫です。あなたにお怪我はありませんか？」

こうして対面すると、彼自身モデルであつても不思議ではないスタイルだということがわかる。身長も百八センチ以上あるだろうか。凛より頭一つ分は高い。

「もちろん。君は、羽のように軽かったからね」

白い歯を覗^{のぞ}かせたその笑顔はあまりに様^{さま}になっていて、凛は思わず見惚^{みと}れた。

「そんな、ことは……」

ただのお世辞と分かっている、異性からの甘い言葉を久しく聞いていなかった凛には、刺激が強すぎた。

「——ねえ、本当に大丈夫？」

「だ、大丈夫です」

「顔、赤いけど」

「だって、それはっ！」

どこか楽しそうに小首を傾げるその姿は、可愛いのに色っぽくて。

「近いから、ですっ……！」

わずかでも動けば唇が触れてしまいそうな距離に、凧は悲鳴にも似た声で言った。

そんな凧とは対照的に、余裕たっぷりな男性は「ごめんね」と苦笑する。

「日本に帰って来たばかりで、まだ人との距離感が掴めてないみたいだ」

「日本の方じゃないんですか……？」

現在話している日本語に違和感はないが、やはり外国人だったのだろうか。

頬を赤らめたままきよとんと目を瞬かせる凧に、男性は「半分はそうだよ」と肩をすくめる。

「半分？」

「イギリス人とのハーフだから。一応、英国紳士」

「……自分で言うなんて、おかしな人ね」

少し落ち着くと、彼の顔立ちを眺める余裕もできる。凧はふわりと笑って身体を離れた。

「とにかく、私の不注意でごめんなさい。お怪我がないようで良かったです」

その時、男性の表情がなぜか一瞬固まったように見えた。

気にはなったものの、そろそろ行かなければ。ぶつかつたのが話しやすい人で良かった。

この後の面接も上手くいけばいいなと思いつつ、凧は「それじゃあ」と背を向けた。

「——待って！」

不意に腕を引かれて振り返る。視線の先には、なぜか真剣な面持ちの男性がいた。

「あの、まだ何か？」

男性はその問いには答えず、代わりに凧の全身を——自他ともに『ダサイ』と認める格好を眺めた。次いで凧の顔を正面から見据えて一言、言ったのだ。

「君、どうして『そんな』格好をしてるの？」

「……っ！」

何を、今更。

「あなたには関係ありません、失礼します！」

「待っ……！」

凧は渾身の力で腕を振り切ると、男性の制止も無視して走り出した。

前言撤回。——今日は、厄日だ。

I

それは、今から二年前、大学卒業を目前に控えた二月のこと。自由気ままな女子大生ライフも残すところあと少し、と浮かれていた凧の人生は、その日を境に一変した。

——父・籠宮伊佐緒の経営する会社が、倒産したのだ。

その一報を受けた時、凧が真つ先に心配したこと。それは、
(イタリア卒業旅行は行けるのかしら?)
ということだった。

会社が無くなったのは確かに大変だ。生活スタイルも変わってしまうだろうし、残念だけれど旅行は厳しいかもしれない。しかし動揺する母や家人らとは対照的に、凧はおおむね楽観的だった。

四月からは父に紹介された旅行会社で働くことが内定している。しかもその社長とは、昔から家族ぐるみで懇意懇いにしており、凧も幼い頃から『おじさま』と慕っている人物だ。

多少不自由するかもしれないけど、普通に生活していくぶんには問題ないだろう。新社会人としての不安はあるが、きつとなんとかなるはずだ。何か困ったことがあれば、おじさまを頼ればいい。そう、思っていたのだけれど。

「申し訳ないが、今回の話はなかったことにしてほしい。理由は、分かるね？」

大好きなおじさまから遠回しに内定辞退を求められて初めて、凧は事態の深刻さを知った。

時を同じくして、友人だと思っていた子からも、パーティーの度に凧に言い寄ってきた男性たちからも、一切の連絡がなくなった。

家に戻らない父。娘を残して実家に帰ってしまった母。

けれど両親の不在はさして問題ではなかった。彼らは凧の欲しがる物を何でも買い与え、どんな我儘わがままも許していたけれど、そこに『家族の愛情』を感じたことは、ほとんどなかったのだから。

使用人たちは蜘蛛くもの子を散らすように屋敷を出ていき、広い屋敷には凧一人が残された。

その家からもたくさん家財が運び出されていく。

来客の度に自慢していた父の絵画コレクションも、先々代から受け継がれてきたアンティークの家具も、電化製品から、それこそ凧の持っていたブランド品の数々に至るまで、ありとあらゆるものが差し押さえられたのだ。当然、屋敷にそのまま住んでいられるはずもない。

凧に残されたのは、最低限の身の回りの品と古いアパートの一室。そして、慎ましく暮らせばなんとか数ヶ月は過ごせるだろう預金残高が記載された通帳だけだ。通帳を凧に手渡したのも、アパートへの入居手続きも、全ては父ではなく、秘書が代理で行ってくれた。

学費を全額前納していた大学を卒業できたことだけは幸いだったが、卒業式には参加していない。式のために新しく仕立てた本振袖ほんふりそでは既に凧のものではなかったし、可愛く着飾った級友たちを笑顔で祝福できるほど、当時の凧に余裕はなかったのだ。

その後の一人暮らしは、右も左もわからなかった。

朝の起床も髪形のセットもお手伝いさんに任せるのが当たり前だったし、幼稚舎から大学までの通学は運転手付きの車で送迎。

『してもらって当たり前』の生活。

日々のそれにお礼を言ったこともなければ、特にありがたいと思ったこともない。

だから、初めは本当に大変だった。そもそも『慎ましい暮らし』がどういうものなのか、凧には分からない。預金残高はあつという間に底を尽きかけた。

このままでは来月の家賃も払えない。それどころか、光熱費だってぎりぎりだ。

そうやって初めて、凧は自ら職探しを始めた。もちろん目指すは正社員。しかし、当然ながら『典型的』お嬢様の凧を雇ってくれるところはどこにもなかった。

収入がなければ生活が成り立たない。正社員になるまでの繋ぎでいい、とにかく働かなくては。焦った凧が最初のアルバイトに選んだのは、ファミリーレストランの接客業。しかしそこは、カルチャーショックの連続だった。

まず、あの値段で食事ができるのが信じられない。店内は騒がしく、休日ともなれば目が回るような忙しさだ。けれどそれ以前に、凧は『頭を下げる』ことができなかった。(なんで、そんなにペコペコしなくちゃいけないの?)

(こんなに働いて、これだけしかお給料をもらえないの?)

お客様に注意されればむっとして、バイト仲間に注意されると機嫌を損ねて無視をする。今までの凧はずっと人の輪の中心にいた。周りが凧に合わせるのが当たり前。

級友たちにも一目置かれ、異性だってみんな凧の気を引きつけたのだ。バイトを解雇されても、凧は自分が悪いとは露ほども思わなかった。だが、その後も様々なバイト先を続けてクビになり、凧はようやく自覚した。

(間違っているのは、私の方……?)

以来、凧は心を入れ替えて働こうとしたけれど、身に着いた仕事や考え方はそうそう簡単に変わらない。いくつかのバイトを掛け持ちしたり、短期契約社員として働いたりしたこともあるが、やはり正社員への道は厳しかった。何度も面接を受けては落ち、落ちては受けを繰り返す。時間は瞬

く間に過ぎて、おんぼろアパートにも愛着も感じるようになった今、気づけば二年の月日が経っていた。



「籠宮凧さん、二十四歳。職歴は……アルバイトと派遣だけ?」

白髪交じりの面接官の失笑に、凧はすぐに悟った。

(この面接、ダメかもしれない)

駅でのいざごはあったものの、凧は気持ちを切り替えて面接に臨んだ。

就職活動を始めた当初は、自己紹介をするだけで精いっぱいだった。しかしある程度数をこなすと対応にも慣れ始め、今では最初のやりとりでなんとなく結果を予想できるまでになっている。そして残念ながら、その的中率は現在のところ百パーセントだ。

「二つ目のアルバイトを始めるまで空白の期間があるけど、大学を卒業してからは何をしていたの?」

「家事手伝いをしていました」

「それって、ようはニートだったってことだね。その後はいくらか働いていたとはいえ、学生時代にアルバイト経験もないみたいだし、……ちょっとそういうのは、ねえ」

「あのっ! 確かに勤務経験は少ないですが、やる気は十分あります! あと、御社の応募要項には職歴不問、とあったと思うのですが……」

「確かにそう求人を出したけど、それは言葉のあやというか、まあ、常套句じょうとうくだよね」

時間の無駄。目の前の人がそう思っているのは、悲しいけれど手に取るように分かった。

「それに、これ何？ 趣味・特技欄がここまでぎっしり書かれてるのは初めて見たよ。華道に茶道、日舞にちぶまにピアノ？ バレエに書道って、これ本当？」

「はい！ 十年以上、習っていました」

「へえ。語学にも堪能たんのうなんだ。何語がいただけるの？」

「英語と、あとはフランス語はある程度話せます」

「で、それが何かの役に立つの？ うちが一部上場の一流企業っていうならいいと思うよ？ 社長秘書とか、受付嬢とか、君の『ご趣味』を活かしてくれる部署もたくさんあるだろうね。でもうちがそうじゃないことくらい、分かるよね？ 欲しいのは実務のできる人なの。……それにねえ」

面接官は、凛を頭から足先まで誉め回すように眺めた後、ふっと鼻で笑った。

「仮にうちが大企業でも、『君みたいな』子は受付に座らせられないね」

君みたいなダサイ子、どこの会社も取らないよ。そう、言外げんがに示されたような気がした。

——恥ずかしい。しかし、面接官の言っていることも、正しいのだと思う。

確かに一般事務の仕事に、綺麗な花の生け方なんて役に立たない。

今日も言われるのだからと覚悟はしていた。しかし改めて現実を突きつけられると、自分のこれまでの生き方を全て否定されたようで、喉の奥がひゅっと詰まるような感覚がした。

「あなたが幼稚舎から大学まで通っていたところ、有名なお嬢様学校だよ。で、経歴を見てもそ

の通りだ。その上『籠宮』ときた。間違っていたら申し訳ないけど、あなた、籠宮社長の血縁者？」

面接で家族について聞くのはマナー違反。大学卒業後から就職活動を始めた凛でも、それくらいは知っている。だからこの質問に対する答えは簡単。にっこり笑ってごまかせばいい。

「……はい。籠宮伊佐緒は、私の父です」

しかし、何度同じ質問をされても凛はこう答えてしまう。

「——ご苦勞様。結果はまた改めて連絡しますよ」

面接官と視線が合うことは、二度となかった。

(……また、ダメだった)

二社目の面接を終えた凛は、半分ぼんやりとした状態のまま、会社のエントランスを後にする。

一社目のやりとりを引きずって臨んだ二社目の面接では、集中力も切れて散々だった。

面接内容に特段変わった質問はない。氏名と年齢、経歴。趣味や特技、あとは業務内容の確認。

唯一印象的だったのは、担当の男性が終始にこにこしていたことだろうか。

秘書室長の斉木さいきと名乗ったその人は、凛の名前を聞くなり一瞬驚いたように見えた。

彼も『籠宮』の姓に反応したのだろうかけれど、触れられなかったのはありがたい。

「——着信？」

鞆なまから取り出したスマートフォンに目をやると、着信履歴が一件残っていた。最初の会社だと気づいた凛はすぐにかけ直す。面接からまだわずか数時間。こんなに早く結果が出るのは珍しい。

ドキドキしながら待つっていると、コールが五回ほど鳴ってようやく応答があった。

電話口の女性のけだるそうな声に一瞬怯みそうになるけれど、明るい声を作って電話をもらった旨を告げる。繋がったのは、あの面接官だった。

『あー……籠宮さん？』

「はい！ 先ほどはお電話に出られず申し訳ありませんでした」

『いいえ。で、結果からお伝えします。せっかく来てもらって悪いけど、今回は御縁がなかったという事です。それじゃ、これで失礼しますよ』

凜の返事を待たずに電話はぶつりと切れた。

予想していたはずだ。しかしいざこうなると、今度は別の意味でドキドキが止まらない。

六月下旬。梅雨時の今、湿度は高く、スーツの下にじんわりと汗をかいている。肌は不快な生ぬるさとこの時期特有の暑さを感じているのに、身体の芯はひんやりと冷たい。

(……大丈夫)

面接に落ちるのなんて慣れっこだ。今回はたまたま、父のことを言われたせいで、凹んだだけ。落ち込んでいる暇はない、すぐに次の会社を受けないと。それでもダメなら日雇いのアルバイトを見つけないければ、住む場所さえなくしてしまう。

——とにかく、何かを胃に入れていったん落ち着こう。

視線の先にはちょうど、アメリカの大手コーヒーチェーン店がある。

新作フェアが始まったばかりらしく、生クリームのたっぷり乗ったコーヒーフローズンの写真に

そそられた。昔は生意気にも『あんなもの』と敬遠していたくせに、今では『贅沢なもの』として目に映る。財布に余裕はないが、今だけは自分のことを甘やかしてあげたかった。

入店して季節限定のそれを注文すると、少しだけ気分が浮上した。このまま散歩がてら帰るのもいいかもしれない。近くに公園があるし、そこでのんびり一休みしよう。そうすれば、この悶々とした気持ちも晴れるような気がした。

(気持ち、切り替えなきゃ)

凜がカップを片手に店を出ようとした、その時だった。手元のスマホに視線を落として向かってくる男性が視界に入る。避けようとしたが、下を向いた男性は、そのまま凜にぶつかってきた。

「いたっ……！」

正面から強い衝撃を感じた凜は、バランスを崩してその場に倒れ込んでしまう。

「——あつぶねえな！ ど見てんだ、このブス！」

顔を上げると、舌打ちをして凜を見下ろす中年男性と目が合った。ぶつかってきたのは、明らかに男性の方だ。それにも拘らず、彼は謝罪するどころかそう吐き捨てた。

尻餅をついたせいでお尻がじんじんと痛い。さらに上半身にびっしょりと濡れた感触があった。

混乱するまま自分の身体を見下ろせば、白いブラウスは零れたコーヒーと生クリームを浴びて酷い有様だ。右手に握ったままのカップから中身がぼたぼたと零れ、手首を伝っていく。

男性は立ち去る気配もなく、凜を罵倒し続ける。

何か言わなければと思うけれど、喉の奥が張り付いてしまったように声が出ない。

——ぶつかって来たのはあなたの方でしょう、謝りなさい！
そんな風にはつきりと言えたのはもう、過去の自分だ。

今の凧は、ただ小さくなつて嵐が過ぎるのを待つことしかできなかった。

「ちっ、なんとか言つたら……」

「——今のは、明らかにあなたの不注意だろう」

誰もが見て見ぬフリをする中、その声は確かに凧の耳に届いた。

凧は、顔を上げる。そこには数時間前に別れたばかりの人物がいた。

「大丈夫？」

駅で会つた時と同じように、彼は柔らかく笑む。予期せぬ再会に驚く凧に、彼はそつと水色のハンカチを差し出した。

「これを使つて。少しだけ待つてね」

反射的に受け取ると、彼は「大丈夫、すぐに終わるよ」と凧を背にかばつて男と向かい合う。

「彼女に、謝罪を」

「……はあ？ んだてめえ、関係ないやつが口出すんじゃないよ！」

「聞こえなかったの？」

凧に背中を向けたまま、彼は無表情に言い放つた。

「——謝れ、と言っている」

強い言葉に、対面した中年男性の肩が一瞬びくと震える。それ以上の反論を許さず、彼は淡々

と続けた。

「俺は、あなたからぶつかったのをはつきりと見たよ。もちろん、他にも証人はいるだろう。この店の店員にも、客にもね」

「……ちっ、だから何だつて——」

「耳だけじゃなく頭も悪いの？」

その瞬間、声が一変した。

「するべき謝罪もできないなら、今すぐ消える」

一切の抑揚を打ち消して彼は言った。顔を真っ赤にしていきりたつ中年と冷静な態度を崩さない男性。二人の違いは誰の目にも明らかだった。

「それとも警察を呼んで出るところに出ようか？ 希望するならいつまでも付き合つてあげるよ」

口調こそ丁寧なもの、低く据わつた声色に、中年は最後に舌打ちをして、逃げるように去つていったのだつた。

「待たせてごめんね」

凧の方を振り返つた彼の雰囲気は、一転して穏やかなものへと変わつていた。ズボンの膝が汚れるのも構わず地面に片膝を突くと、彼は未だ座り込んだままの凧を心配そうに見つめる。

「あの、わたし」

「……立てる？」

言われて気づいた。足に力が入らない。耳の奥に残る怒鳴り声に、まだ足が震えていたのだ。も

しも彼が助けられなかったら、凧は今も怒鳴られていたかもしれない。

(……怖かった)

震えをなんとか抑えようとぐつと拳を握ったその時、凧の身体がふわりと浮いた。

「あ、やっぱり軽い」

彼は、流れるように自然な仕草で凧を抱き上げていた。横抱きのいわゆる『お姫様抱っこ』の状態に凧が呆気に取られていると、彼は改めて「危ないから動かないでね」と凧をぎゅつと抱き寄せる。密着したことで、零れたコーヒの汚れが彼のシャツにも移ってしまった。

「は、放してください！ 服、汚れますから！」

凧は慌てて彼の胸を押すが、見た目よりもずっと引き締まった身体はびくともしない。

「そんなの、どうでもいい……それよりも」

彼は左手を凧の後頭部にそっと添え、いつそう優しく抱え込んだ。

「君が泣きそうな顔をしている方が、ずっと気になる」

「——っ！」

一度会っただけの関係で、『そんな格好』なんて馬鹿にしてきたくせに、どうして優しい言葉をかけてくれるの。

面接の時からずっと気を張っていたからだろうか。不意に触れた優しさに、氷のように固く閉ざされていた凧の心はいともたやすく溶かされてしまった。

「もう、いやっ……私だって頑張ってるのに、なんでっ……怖かった……！」

◇ ◆ ◆ ◇

シャツが汚れるのも構わず抱き締められた途端、凧の気持ちは決壊した。

店の入り口であれだけの騒ぎを起こしたのだ。今も通行人の遠慮のない視線は四方から凧を突き刺していく。しかし彼は、それら全てから守るように、凧を強く優しく包み込んだのだった。

◇ ◆ ◆ ◇

「——落ち着いた？」

「……はい」

近くの公園のベンチにそつと下ろされた凧は、俯いたまま小さな声で答える。

今日会ったばかりの男性に横抱きにされて、その上子供のように泣いてしまった。

みっともないところばかり見られて、どんな顔をすればいいのかわからない。そんな凧に何を思ったのか、「はあ」と深いため息が聞こえてくる。

「君は、本当によく人にぶつかるね」

聞き捨てならない台詞に反射的に顔を上げる。自分の不注意だった一回目はともかく、二回目は不可抗力だ。そう続けようとした凧の言葉を遮ったのは彼だった。

「やっと、顔を上げてくれた。……さっきの君は巻き込まれただけだ。見ていたから分かるよ」

男性は、凧を見てほっとしたように笑う。凧は反応に困りながらも、自分が汚してしまった男性のシャツを視界の端に認めてはっとした。

「汚してしまって、本当にごめんさい」

凧がまずすべきは謝罪だ。こうして正面から見ると、べっとりとした汚れはハンカチで拭いた程度では取れそうにない。クリーニングでも落ちるか微妙なレベルのそれに『弁償』の二文字が頭を過るけれど、すぐに自分の経済状況も思い出す。

コーヒーを買ってしまった今、帰りの電車を抜かせば今の凧はほとんど無一文だ。

「あの、連絡先を教えてくださいませんか？」

男性は目を瞬かせると、形の良い唇の端を上げてにっこり笑った。

「驚いた、逆ナン？」

「違います！」

まだ人との距離感が掴めていないと言っていたけれど、この何とも言えないノリは彼自身のもののような気がする。

「シャツ、弁償させてください。ただ、今は手持ちが少なく……後日改めてお詫びしますので、連絡先を教えてくださいませんか？」

「気にしなくていいよ。俺よりも君の方が心配だ。シャツもスカートも大分汚れている。時間があろうなら、君の服を買いに行こう。もちろん、お金の心配はしなくていいよ」

「そんな、助けて頂いただけでも十分感謝しているんです。それに、見ず知らずの方にこれ以上ご迷惑をおかけするわけにはいきません」

「……見ず知らず、ね」

「あの、何か？」

「ううん、こっちの話。でも、俺がいつって言っているのに、君もなかなか頑固だね」

あまりの言い草に堪らず口を開きかけた凧に、男性はくすりと笑って続けた。

『長篠』

一拍置いた後に、それが彼の名前なのではと気づいた。

「……長篠さん？」

凧が名前を呼べば、長篠は「そう」と満足そうに頬を緩ませる。

「これで『見ず知らずの方』じゃなくなったね？」

言葉遊びをしているわけではない、と言い返す凧を、長篠はなぜか楽しそうに見つめる。

その熱心な視線に、凧はそっと目を逸らした。この抜群に整った顔立ちに対する耐性など持ち合わせていない。

「……私の顔に何かついていますか？」

このタイミングでこの人からも『ブス』なんて言われたら、さすがに立ち直れない。

しかし長篠の答えは予想の斜め上を行っていた。

「駅で会った時も思ったけど、本当に可愛い顔だなあと思ってた」

一瞬、自分の耳を疑った。しかしその直後に感じたのは苛立ちだ。

「……バカにしたくせに」

「俺が、君を？」

『そんな格好』って言いましたよね」

覚えがないと言わんばかりの態度に、思い出させるよう凜は少しだけ強い口調で言った。凜とて、好きでこんな格好をしている訳ではないのだ。誰もが見惚れるだろう長篠と、みすぼらしい凜。そのあまりの違いに俯きかけたその時、「違うよ」と穏やかな声が凜の動きを止めさせた。「そういう意味で言ったんじゃない。……でも、そっか。だから、あんなに怒ってたのか」

確かにそれもあるが、一番は凶星を指されて恥ずかしかつたのが理由だ。

「さつきも言ったけれど、君は可愛いよ。だからこそ、それを隠すような格好をしていたのを不思議に思つて。薄化粧も清楚でいいけど、君はもつと自分の魅せ方を知っているはずだ」

よどみなく紡がれる誉め言葉にからかいの色は微塵もない。何より、凜のことを知っているかのような口ぶりに驚かずにはいられなかった。凜と長篠は今日が初対面のはずだ。

「……以前、どこかでお会いしたことがありますか？」

駅で感じた妙な既視感。見つめる凜に対して、長篠はやはり薄く微笑んだままで。

「それ、やっぱりナンパにしか聞こえないけど。君のお誘いなら、喜んで受けるよ？」

「……いいです、もう」

若干煙に巻かれたような気がしないでもないが、凜は疑問を呑み込んだ。

（そうよね。こんなに目立つ人と会っていたら、覚えてはいるはずなもの）

昔、会社関連のパーティーで会ったことがあるのではと思つたが、やはり気のせいだったようだ。気を取り直し、改めて連絡先を聞こうとすると、にこやかにこちらを見つめる長篠と目が合った。

「——決めた」

「な、なにをですか……？」

今の凜に誠意はあるが、お金はない。いったい何を求められるのだろうと不安な凜とは対照的に、長篠の顔は妙に晴れやかだ。

「……つと、その前に。そのままじゃコーヒーの跡が目立つから、これを着て。俺ので悪いけど、ないよりはましだと思っから」

長篠は自分の着ていた薄手の紺のカーディガンを脱ぐと、さつと凜の肩に羽織らせた。

突然の行動に目を丸くする凜の手をそつと取つて、長篠はベンチから立たせる。

「お詫びの方法。お金は必要ないよ。——君の身体一つあればね」

含みのある言葉に思わず固まつたその隙に、長篠は凜の手を引いて歩き出す。

「ちよつ、長篠さん!？」

身体一つ、だなんて冗談じゃない。凜は慌てて両足に力を込め、抵抗を試みる。しかしその行動すら予想の範囲内とでもいうように、長篠は余裕の表情で振り返つた。

「大丈夫、こんな昼間から変なことをする趣味はないよ」

それなら今すぐ放してください、と言いつ返す凜に対して、長篠は悪戯っぽく微笑んだ。

「大人しくしてくれないとまたお姫様抱っこするけど、それでもいい？」

今度こそ凜は言葉を失つた。ある種、緊急事態だった先ほどとは違い、ここは真つ昼間ののどかな公園である。人の往来こそほとんどないものの、少し歩けば高級ブランド店が軒を連ねる商業通

りに出てしまうこの場所で、横抱きにされたら目立つどころではない。

凧の片手はきゅっと握られている。この様子では、長篠が自ら手放すつもりはなさそうだ。

答えに窮する凧をさらに追ひ込むように、長篠はゆっくりと一音ずつ言葉を続けた。

『お詫び』。してくれるんだよね？』

じいっと凧に視線を向ける長篠の雰囲気は言葉とは裏腹に柔らかい。ヘーゼルの瞳に見つめられると、それだけで鼓動が速まる気がする。この人が、凧を傷つけることをするには思えなかった。

「……私にできることでしたら」

「君にしかできないことだ。——さあ、行こう」

やはり、長篠は凧の手を握ったままだ。握り返すことこそしないものの、凧はひとまず抵抗することを止めた。

(不思議な人)

隣を歩く長篠はとても機嫌が良いように見えた。

公園を出てすぐに商業通りへと入った凧と長篠だが、すれ違う人は皆、一様に二人を目に留めた。やはり服の汚れが目立つのだろうか。凧は、借りたカーディガンの前を片手できゅっと掴む。

しかし、すぐにそれは勘違いであると悟った。

人々が——主に若い女性が見ているのは凧ではなく、長篠だ。

すらりと長い四肢を持つ長篠は、凧より頭一つ分以上背が高い。

ショーモデルが本業であると言っても何ら違和感のない体形。羽織っていたカーディガンを脱ぎ、

サマーシャツ一枚となった長篠の上半身は、見事なまでに引き締まっている。

肩同士が触れ合うほど近くにいるからこそ分かる。薄らと盛り上がった胸部は逞しく、ゆっくりと歩く足運びは実に優雅だ。

抜群に整った顔立ちも、鍛えられた体躯も、その全てが長篠という男を魅力的に見せていた。

「この店だよ」

長篠の進行方向からもしかやとは思っていた。しかしいざ店の前にやってみると、今までとは別の意味で緊張した。高級店が建ち並ぶ通りの中でも、この店は格が違う。

欧州のとある王室の御用達としても知られるこのブランドは、数年前日本に初出店した際、各メディアで大きく報じられたものだ。

元々はスーツ専門店でありながら、近年ではカジュアルブランドも展開し、そのどちらも成功させている。

お詫びのために連れてこられた先は、想像以上の高級店。今一度、凧の頭に口座残高がよぎる。

(だめ。絶対、ムリ！)

すぐに帰って日雇いバイト先を探そう。しかしそれだって、シャツの弁償には一体何日働いたらいいのか——

「……何を考えているのか大体想像がつくけど、ここで君に何かを買わせようなんて思っていないからね？」

青ざめる凧の隣で長篠は笑いを噛み殺すと、躊躇いなく凧の手を引いた。長篠が一步足を踏み出

すと、気づいた店員によって内側から扉が開かれる。

「長篠様、いらつしやいませ。ようこそお越しくださいました」

「さっそくで悪いけど、彼女に似合いそうなスーツ一式を何点か、合わせて小物も見せてくれるかな」
「かしこまりました。何かご希望の点はございますか？」

「フォーマルなものと、普段使い用の両方を。——ああ、そのダークグレーのスーツ、いいね。サイズもちょうどよさそうだ」

長篠がすぐ近くにあつたレディーススーツに視線をやると、店員はすかさずそれを手に取った。
「インナーはホワイトのシフォンブラウスがあればそれを。まずはそのスーツを試着してみ、その間に俺が色々と見させてもらうよ」

「承知いたしました」

「長篠さん!？」

テンポよく進む会話の内容に驚き、凛は慌てて二人の間に割って入る。しかし長篠はそれを無言で流し、右腕を凛の腰に回すと有無を言わず店の奥にある個室——恐らく試着室だろう——へ誘った。

「どうぞ、お嬢様?」

冗談とはいえ、その呼び方は洒落にならないからやめてほしい、とか。

なぜ私のサイズがわかるのか、とか。そもそもなぜ、自分の服が選ばれているのか、とか。

そんな当たり前の疑問を凛が聞く間もなく、「いつてらつしやい」と試着室の扉が閉められたの

だった。

——どうして、こんなことに。

問答無用で試着室に入れられた凛のもとには、次から次へと洋服が運ばれてきた。

仕事で使えるようなスーツやインナーはもちろん、私服で着られそうなブラウスやスカート、ワンピース。試着している間も、扉の外からは、長篠の「これもいいね」「ああ、それも」とやけに明るい声が聞こえてきた。さすがにパーティーで着るようなドレスが手渡された時には、「お願いですからもういいと伝えて下さい!」と女性店員に懇願した。そして、今。

(これが、私?)

鏡の中には、身体のラインにぴったりと沿った品のあるダークグレーのスーツを着た一人の女性
が映し出されていた。女子大生や面接官に鼻で嗤われた野暮ったい凛はどこにもいない。

一見お堅い印象を与えるジャケットからは、ホワイトのシフォンブラウスが覗き、柔らかな雰囲気に見せる。少し動くときわわりと揺れるフレアスカートは、凛の細身ながらも女性らしいシルエツトをよく引き立てていた。きっちり一つ縛りにしていた髪の毛は、「こちらの髪形もお似合いですよ」と女性店員がハーフアップにしてくれる。バレッタはもちろん、店側が用意したものだ。

『高級ブランド』の洋服は過去に数えきれないほど着ていたし、むしろ普段着だった。もちろん、スーツを着たことも何度もある。

しかしそれはいずれも『働く』ことなど何も知らない、無知な子供の頃の話だ。

まだお世辞にも立派な社会人とは言えないものの、こうして『大人』の自分が改めて、きちんとしたスーツを着ている。それだけで、心なしか表情まで明るくなった気がした。

(……シンデレラみたい)

今の凛は、舞踏会に行けるようなドレスもガラスの靴も履いていないけれど。

そんな、小さな女の子みたいな想像をしまわうくらい、鏡の中の凛は鮮やかな変身を遂げていた。

「着られた？」

不意に扉の外からかけられた声とノックの音に、びくん、と肩が震える。

「はい、大丈夫です！」

今の今まで自分の姿に見惚れていたことに気づき、凛は慌てて返事をした。すると、「開けるよ」という言葉と共に扉はゆっくりと開かれた。

最初に、綺麗な白シャツが視界に入る。長篠も着替えを済ませたようで良かったと安堵したその時、瞳を大きく見開く彼と目が合った。食い入るような長篠の視線。彼は、それこそ頭のとっぺんからつま先まで、凛の全身を見渡していた。

「……長篠さん？」

彼が選んだダークグレーのスーツは我ながらとてもよく似合っていると思っただが、勘違いだったのだろうか。不安に思っ着小首を傾げる凛に、長篠ははっと我に返ったように目を瞬かせ、「……ごめん」と小さく言った後、

「——綺麗すぎて、見惚れてた」

と、とろけるように微笑んだのだ。その瞬間、凛の頬に熱がともった。

(な、この人何を言っ……!)

顔が熱い。心臓がドクン、ドクン、と痛いくらいに鼓動を刻み始める。

それは、今日出会った時から彼が見せたどの笑みとも違った。まるで恋人を見つめるような——凛のことが愛しくて堪らないとでも言うような、チョコレートみたいに甘いその笑顔。

『可愛』

『綺麗』

お嬢様時代にうんざりするほど聞いたそれは、凛にとっては挨拶くらいの意味しか持たなかった。

それなのに今は違う。長篠の言葉一つに、こんなにも動揺してしまう。

「——うん、いいね。本当によく似合ってる」

本当に、やめてほしい。これ以上言われたらきつと、凛の心臓が持たない。

「そのスーツだけでなく、他の服や小物もぜひ使ってくれと嬉しい。どれもきつと、君に似合うはずだよ」

これには別の意味でぎよつとした。

「そんな、頂けません！」

「どうして？」

それはこちらのセリフだと言いたいのをぐつと堪え、凛は「頂く理由がないからです」とはっきりと告げた。凛が弁償の為に長篠のものを購入するならいざしらず、自分がこんなにも高額なもの

を「はい、ありがとうございます」と受け取れるはずがない。しかし、長篠は引かなかった。

「受け取ってもらわないと困るな。だつてもう、購入済みだから」

凜は、長篠の後ろに立つ店員をぼつと見る。店員は、「後ほどお届けいたしますので、ご住所をお教え願えますか？」と実ににこやかな笑顔を凜に返した。

「今日彼女が着ていた物も一緒に送つてね」

「かしこまりました」

店員は綺麗な一札をすると試着室を出ていった。扉は開いたままといえ、個室に二人きり。その状況にわずかに緊張しながらも、凜は再度長篠に説明を求める。

服を汚された、いわば被害者が汚した張本人に代わりの服をプレゼントするなんて話、聞いたことがない。

「『頂く理由がない』か。理由ならあるよ。これは、俺のせめてものお詫びの気持ち。朝、君にぶつかった時、『そんな服』なんて失礼なことを言ってしまったからね。だからこれは、その謝罪の意味も含んでる」

「私からあなたへのお詫びは？」

「君が俺の選んだ服を着る。俺はそれを見て目の保養ができる。それで十分だよ」

こうも感覚が違うと、もはや何も言い返せない。しかし、与えられるものを「ありがとう、頂くわ」なんてあっさり受け取ることができたのは、過去のことである。

タダより高いものはない、と昔の人はよく言ったものだ。

長篠と過ごしたわずかな時間で凜が彼について得られた情報は、ほんのわずか。

本人の言葉を信じるなら、最近日本に帰国したばかりのハーフのイケメン。そしてお金持ち。

それだけだ。

「……やっぱり、受け取れません」

「困ったな。それだと、せっかくの素敵な洋服が無駄になってしまう。残念ながら、俺に女装の趣味はないしね」

「なら、これが似合う素敵な女性に贈つて差し上げて下さい」

「俺は今、そうしたばかりだよ」

「ですからっ！」

「『素敵な靴は、持ち主を幸せな場所に誘つてくれる』」

長篠は凜の言葉を遮ると、穏やかな声のトーンで話し始めた。

「俺の好きな言葉の一つだ。有名だから、君も一度は聞いたことがあるんじゃないかな？」

確か欧州のことわざの一つだった気がする。戸惑いながらもうなずくと、長篠はそう、と微笑んだ。

「それは、服にも共通すると思うんだ。もちろん、一番大切なのは服を着るその人自身。でも、その人に似合う服は持ち主に自信を与えてくれる。あるいは、新しい魅力に気づかせてくれる。それって幸せへの一歩だと俺は思うけど、君はどう？」

確かに素敵な言葉で考え方だ。しかし長篠が言わんとしていることが、凜には分からない。

「さっき、俺に『受け取れない』ってはっきり言った時。君は背筋を伸ばしてまっすぐ俺を見てい

た。とても凜としていて、綺麗だったよ。零れたコーヒーを片手に俯いていた時の君とは、大違
いだ」

長篠はゆっくりと右手を上げる。大きな手のひらがそつと凜の頬に触れた。凜は、なぜか動くこ
とができなかった。不思議な色合いの瞳に、囚われる。

「小さく縮こまっている君も可愛いけど、自信たっぷりに言い返す強い君の方が、俺は好きだな」

「長篠さ——」

熱を持った親指が唇をなぞり、凜の顔に影がかかった、その時だった。

まるで触れ合いを引き止めるかのように、大きな着信音が試着室に響く。

凜は、はつとしてすぐに一歩後ずさる。長篠はほんの一瞬、着信音に苛立ったように眉根を寄せ
ると、「ごめんね」と短く断って、ズボンのポケットからスマホを取り出した。

「はい。……ああ、ごめん。まだちょっと——」

電話をする横顔に、凜はああ、と深い息をついた。

——まだ、胸がドキドキしている。

(……キス、されるかと思った)

それほどまでに長篠の距離は、近かった。キスなんてまさか、と思う自分と、もしかして、と思
う自分と。いったい今日だけで長篠にどれだけ驚かされたのか、もはや数えきれない。頬に残る熱
を何とか引かせようと呼吸を整える凜の前で、長篠はどこか焦ったように会話を続けていた。

「分かった、だから悪かったって。ああ、すぐに戻るから。悪かった、じゃあな」

電話を終えた長篠は肩をすくめて苦笑した。

「——タイムリミットみたいだ。もう戻らないと。駅まで送ろうと思ったのに、ごめん」

ほんの一瞬、残念だと思った自分に内心驚きながらも、凜は「分かりました」と頷いた。

凜の方に彼を引き止めなければならぬ理由はない。しかしやはり、購入済みという洋服の始末
についてはもう一度物申さなければ。そうして口を開きかけた凜を止めたのは、同じく長篠だった。

「ストップ」

柔らかな人差し指が強制的に凜の唇を封じる。

「お詫びは済んだし、洋服は君の物。どうしても納得できないなら、次に会った時に俺のことを名
前で呼んで。それで今回の話はチャラだ」

聞いたのは苗字だけで名前なんて知らない！ 視線で抗議する凜を長篠はふつと目を細めて見下
ろすと、そのまま空いた左手で凜の右手をすくう。

——その後の動きは、まるで映画のワンシーンを見ているようだった。

ちゅつと、柔らかな感触が手の甲に落とされた。物語の騎士が姫君に忠誠を誓うかのごとき、そ
の仕草。目を見開いて固まる凜を長篠は上目遣いで見つめた。

「またね、凜」

甘い囁きと柔らかな余韻だけを残して、彼は去っていった。

「……名前」

凜は長篠に一度も名前を名乗っていない。しかしその事実が付いた時には既に遅い。凜は仕

方なく、新しいスーツを着て自宅へと帰宅したのだった。

その夜。畳に敷いた煎餅布団に横になった凛は、今日一日で起きたことを思い出し、身もだえしてころころ転がっては青ざめていた。何度かそれを繰り返すとさすがに虚しくなってきた。同時に一気に眠気が訪れる。本当に、色々なことがあった一日だった。

面接に落ちて、歩きスマホの男性に絡まれて。そうかと思えば信じられないほどたくさん洋服を買い与えられ、キスをされた。

なぜ、彼は凛を知っているのか。『またね』とはどういう意味なのか。

分からないことばかりで悩みは尽きない。しかし、身体も心も大分疲れていたらしい。

翌日、服と小物の配達を告げるチャイムが鳴るまで、凛は熟睡したのだった。

——凛の採用を告げる電話が鳴ったのは、それから数日後のことである。

II

『LNグループ』

イギリスに本社を置く老舗化粧品メーカーは、世界的にも名の知れた外資系企業である。

女性なら誰しも一度は耳にしたことがあるだろう化粧品の有名ブランドを数多く持っており、長

篠に似たモデルがイメージキャラクターを務めるグロスも、この会社が発表したものだ。

その日本支社の面接を凛が受けたのは、今から一ヶ月前——長篠と出会い、別れたあの日である。

あの時はまさか、LNグループに採用されるとは思いもしなかった。

英語が堪能であること、お茶やお花など日本の伝統芸能に明るいことが採用理由の一つだったと、後に面接官の斉木は教えてくれた。

履歴書が通過しただけでも驚きだったのに、まさかの大企業に、まさかの就職。

そして右も左も分からない凛が配属されたのは、総務部秘書課だった。

秘書課の業務内容は多岐に亘る。社長を始めとした役員のスケジュールやアポイントメントの管理、書類の翻訳……と、サポート全般と言っている。こまごましたことを上げればきりが無いのだが、新人社員の凛の主な仕事は、先輩社員のサポートだ。

書類の翻訳を手伝うこともあれば、お茶を入れたり、電話を取ったりすることもある。

一般企業と少し違うのは、社内を飛び交う言葉に日本語と同じくらい英語が多いことだろうか。

正直、慣れないことばかりで初めのうちは大変だったけれど、それ以上に『忙しい』毎日——誰かに必要とされる毎日は、楽しくて堪らなかった。そして、七月最終日。

「籠宮さん」

時刻は十七時半。終業時刻の訪れと共に、向かい側のデスクから声をかけられた凛は、緩みかけていた表情を慌てて引き締めた。

「はいー！」

「お疲れ様、もう上がる時間よ」

入社して一ヶ月。凜にはまだ残業するほどの仕事はなく、定時出勤・定時退社を厳命されている。無駄な残業は徹底排除が大前提。周囲を見れば、凜以外の社員もちらほらと帰り支度を始めている。しかし、対面の先輩社員——奥平裕子^{おくひらゆうこ}は、まだ仕事が残っているようで、「疲れたあ」と肩を回しながら凜を見ていた。

「そういえば、今週金曜日の夕方は空いてる？」

「はい、空いています。会議ですか？」

「ううん、飲み会のお誘いよ。場所は、あなたが前に行きたいと言っていたイタリアン。どう？」

奥平とは既に何度か食事を共にしていたが、話題が豊富な彼女と過ごす時間はとても楽しかった。「ぜひ、ご一緒させてください！」

「良かった。あ、今度こそあなたには出させないからね。いい加減、先輩の顔を立てることを覚えなきゃ」

奥平はふわりと笑った。その柔らかな表情に凜は、同性ながら一瞬見惚れる。

今年三十四歳を迎えるという奥平だが、自分より十歳も年上だとはとても思えない。

スッキリとした黒髪ショートカットに真っ赤なルージユ、ホワイトのパンツスーツ。すっかり『憧れの先輩』となった彼女は、新入社員である凜の指導係だ。

「おい籠宮さん！ ぼうつとしちゃって、大丈夫？ 疲れちゃったかな？」

「い、いえなんでもありません、失礼しました！」

からかうように目の前で手をひらひらと揺らされて、凜は慌てて立ち上がる。

まさかあなたに見惚れていました、なんて答えるわけにはいかない。凜の直立不動の姿勢に、奥平は一瞬目を丸くした後、けらけらと笑い始めた。

「あーもう、籠宮さんやっぱいいわあ。ほんつと可愛い、大好き」

凜の方こそ、とびっきりの美人なのにそうやって大口を開けて笑う奥平が大好きだ。

初めての女性の先輩がこんな風に素敵な人で本当に良かった、と思ったその時、奥平の隣に一人の男性が並んだ。

「なんか楽しそうな会話してるな、俺も入れて」

「斉木室長」

斉木徹^{さいもとつと}。きちんとプレスされた白シャツに青のネクタイがキマって見えるその人は、凜と奥平の直属の上司である。

「あら、室長。おかえりなさい。出張お疲れ様でした」

「ありがとう、奥平。あー今回は疲れた」

「室長が弱音を吐くなんて珍しい。その様子だと、新社長と相当やりあったみたいですね？」

「……まあ、な」

先日、LNグループはトップ——イギリス本社に在籍する会長の交代に伴い、大規模な人事異動を発表した。九月一日付で日本本社にも国内外から新しい人員が配属となるらしい。

それもあって斉木を始めとした社員たちは、忙しい日々が続いていた。

「久しぶりに会ったけどあいつ、変わってなかったよ。綺麗な顔して厳しいことばんぼん言ってる」
「早く会いたいわ。私もあの子に会うのは久しぶりだもの」

これに凛は驚いた。斉木は比較的砕けた態度を取っているけれど、社長を「あいつ」呼ばわりするような人ではないと思っていたからだ。それに、奥平まで「あの子」呼ばわりするなんて。

「あら、ごめんなさい。斉木室長、ちゃんと説明してあげないと。籠宮さんが驚いてますよ」

「ああ、そうだよな。九月から来る新社長、実は俺と奥平の昔からの知り合いなんだ。籠宮さんも会ったら驚くよ、きつと。中身はともかく、見た目は相当なイケメンだからな」

俺と同じくらいには、とおどける斉木に凛はくすりと笑った。

「でも、帰ってきて美人の部下同士が笑っているのを見て癒されたよ。俺、この部署で良かった」

「あら、誉めても何も出ませんよ？」

「本心だからね」

「はいはい、ありがとうございます」

奥平と斉木は同期ということもあってかなり気安い関係らしい。二人はこの後も残業をするようだが、終業時間後の課内の雰囲気は日中に比べて比較的穏やかで、他の社員の表情も心なしか明らかった。

「でも、室長のおっしゃることも分かります。この部署の皆さん、綺麗な方ばかりですよものね」

秘書課すなわち会社の華。ここLNグループ日本支社においてもこの女性のレベルは総じて高い。それに加えて一般的なイメージである『女性間のドロドロ』とは無関係なのが幸いだっただ。

女性陣は、奥平を筆頭にさっぱりとした人が多い。仕事内容と同じくらい人間関係が不安だった分、この職場環境は願ってもないものだった。

「籠宮さん、他人事みたいに言うけど、あなたも十分可愛いわよ？」

「ふふ、ありがとうございます。奥平さんにそう言って頂けると、お世辞でも嬉しいです」

働き始めてまだ間もない凛の生活は、相変わらずかつつで、流行りの服を買う余裕もまだない。

しかし意識は、少しずつ変わってきていた。

『さつき、俺に「受け取れない」ってはっきり言った時。君は背筋を伸ばしてまっすぐ俺を見ていた。とても凛としていて、綺麗だったよ』

あの言葉に、凛は気づいたのだ。

——服が安っぽいから、籠宮家の娘だから、落ちても仕方ない。

自分は、いつの間にかそうやって理由をつけて、逃げ道を探していたのではないか。

だからこそ凛は、お嬢様としての傲慢さではなく、今の自分にできる見せ方を意識した。

背筋を伸ばして、名前の通り、『凛』とするように。

「……お世辞じゃ、ないんだけどね」

きよとんと首を傾げる凛の前で、同期二人組はそう言って苦笑した。

「——つと、そうそう、飲み会ね。予定が空いていてよかったわ。あなたの歓迎会をしようと思っているの。メンバーは、私と室長と籠宮さん」

「……私の？」

奥平は悪戯いたずらつぽく微笑んだ。

「気づいてる？ 試用期間は、今日で終わり。明日からあなたは正社員よ」

「明日からも改めて、よろしくな！」

「——っはい！」

笑顔で並ぶ二人に向かって、凛は大きく頷うなずいたのだった。



あの日長篠が選んだ服は、今も部屋の中に大切にしまつてある。

六畳一間ろくじょういっけんの畳のアパートには、クローゼットなんてお洒落しゃれなものはない。

代わりに凛は、百円ショップで買った突っ張り棒を使って押し入れの中に簡易収納スペースを作っている。これまでは、そこに数少ない私服と古着のリクルートスーツが並んでいるだけだった。

しかし、今は違う。押し入れの中には、一人暮らしを始めてから購入した服の倍以上の洋服があった。

パーティードレス、サマーニットにスカート、ワンピース。そして、あのダークグレーのスーツ。

それらは皆、届けられた状態のままだ。スーツ以外は一度も袖を通していないし、タグも切り取っていない。しかしふとした時に眺めては、あの日の出来事を——長篠の顔を思い出す。

その度に凛は、白昼夢はくちゆうむを見ているような感覚に陥おちった。

きつと、もう会うことはないだろう人。それなのに「またね」と意味深な言葉と強烈な記憶を凛に刻み付けたあの人は、いったい何者なのだろう。

夢を見ていたようだ、と思うたびにスーツを見ては、あれは現実だったのだと思ひ知る。凛は人差し指でそつと自分の唇に触れた。

今もはつきりと覚えている。凛よりも大きな手のひらが頬に触れたこと。抱き上げられた時の温かさも、とろけるように甘い言葉も、熱の籠かごもったヘーゼルの瞳も——

凛の唇をそつと抑えた、人差し指も、皆。長篠のことを考えると、それだけで心臓がぎゅうつと苦しくなる。ドキドキして、なのに切ないような不思議なその感覚。

「——それ、どう考えても恋よね？」

え、私いま、中学生の恋愛相談を受けているの、違うわよね？

冗談冗談つぽく尋ねる奥平の瞳は、楽しそうにキラキラと輝いている。仕事中はクールな部分が目立つが、業務後や、今のような昼休みに見せる素の奥平はたまに子供のように無邪気だ。

そのギャップがまた素敵だな、と内心思いながら、凛は持参したお弁当の箸はしを置く。

今日のお弁当は小さな塩おにぎりと、保冷ポットに入れた野菜スープ。この二年間で料理の腕も随分と上がった。社員食堂にはバランスの取れたメニューも用意されているけれど、凛はこれで十分だ。

「ドキドキするって、恋以外の何物でもないと思うけど。その人とは知り合って長いのか？」

「えっと、その……これは友達の話なんですけど」

「その文句って、大抵自分の話なのよね」

うっ、と言葉に詰まる。長篠との出来事を詳細に話すつもりはなかったけれど、彼を想う時に生じる感情を持て余していた凛が頼ったのは、やはり奥平だった。

第三者に話を聞いてもらって客観的に考えてみたかったのだ。一人きりで冷静になるのは、難しすぎた。

「まあいいわ、続きをどうぞ？」

「……男性が、あまり親しくない女性に服を贈る理由を知りたくて。あと、奥平さんなら頂いたものはどうします？」

「その人との関係性にもよるわね。今現在親しくなくて、今後もそうなるつもりがないなら、私なら売るかしら」

一流ブランドの品。未使用でタグはそのまま。なるほど確かに良い値段になるだろう。決して生活にゆとりがあるわけではない凛だが、その考えは全く思い浮かばなかった。

「その様子だと、売る予定はないと。なら当然捨てるつもりもないのよね。なら、使えばいいじゃない。そのままにしておくのはもったいないわ。今度の歓迎会に着ていく服が決まらないって言ってたわよね？ 当日、いくつか持っていらっしやい。昼休みに選んであげる。腕が鳴るわー！」

奥平は美味しそうにハンバーグをどんどん平らげていく。その細い身体によく入るものだと感心しながら見ていると、彼女と目が合った。

「籠宮さん、教えてあげましょうか？ 男性が女性に洋服を送る意味」

「……意味、やっぱりあるんですか？」

凛がきよとんと目を瞬かせたと同時に、奥平の、赤いルージユを引いた艶やかな唇が弧を描いた。

「――脱がせたい服を、贈るのよ」

その仕草にドキリとして目を泳がせた途端、今度こそ奥平は声を噛み殺して笑い始めた。

「籠宮さん、もしかして今まで異性と付き合ったことないの？」

正直に頷くと、「さすがお嬢様」と奥平は納得したようだった。他の誰かに言われたらいい気分のない呼び方も、奥平が言うのと全く嫌味に聞こえない。

「『元』お嬢様ですよ」

「お嬢様だったのは否定しないのね？」

「呆れちゃうくらいに馬鹿で我儘な、ですけどね」

わざとらしく肩をすくめる凛に、奥平もまた悪戯っぽく唇の端を上げる。

「斉木室長から『籠宮家のお嬢様を採用した、指導を頼んだよ』って言われた時は、いったいどんな生意気な子が来るかと思っただけど、実際あなたに会って驚いたわ。想像と全然違うんだもの」

「それは、いい意味ですか？」

「あなたに接する時の私の態度を見ていたら、分かるでしょ？」

はい、と凛は微笑んだ。確かに、間違いない。奥平がいるから会社が楽しいと思えるほど、彼女は本当によくしてくれている。

「……彼氏がいたことがない、かあ。確かに今どき珍しいわよね。じゃあ、初恋は？ この際、子

供の頃でもいいから。ああ、でも幼稚園から大学までずっと女子校だったのよね。それじゃあ出会いもないか」

奥平の言う通り、同世代の異性がない学校では、出会いはないに等しかった。会社の付き合いで参加した集まりやパーティーには異性もいたが、『自分は選ばれるのではなく選ぶ側』と思い込んでいた凛が恋をすることはなかった。

「……昔、一人だけ『好きだな』と思える人がいました」

そんな中、唯一の例外があった。もう十年以上昔、子供の頃の話だ。

「お相手は？」

「うちで働いていた女性の子です。屋敷の離れに住んでいて、母の代わりに私の面倒を見てくれて……だから、彼女の息子と過ごす時間も多かったんです」

相手は籠宮家で働く使用人の子。その当時凛は小学生で、相手は中学生だった。

綺麗な顔をした男の子だった。いつも笑顔をやささないその子は、凛がどんな我儘を言っても意地悪をしても、注意こそすれ決して怒らない。

ご機嫌取りをする男の子しか知らない凛にとつて、その子の態度は初め、とても新鮮だった。

しかしそれはすぐ、『面白くない』という感情が変わる。

貼り付いた笑顔の裏側に潜む本音は無関心だ。柔らかに微笑みながらも凛を見ていない男の子。それが、子供の凛には面白くなかったのだ。

だが成長するにつれて、その感情は自然と恋心へと変わっていった。

——この子の素の顔が見たい。作ったような笑顔ではなく、自分にだけ見せる顔が見たい。

恋心はどんどん空回りして、可愛くないことばかり言ってしまう。

照れ隠しに意地悪をして、酷いことを言つて。それでもやはり、彼は笑っていた。

いつか絶対、この人を振り向かせてみせる。しかし、幼い凛の初恋は呆気なく終わりを迎えた。

ある日突然、彼は姿を消したのだ。彼の母親もまた、一緒に。

「——なんていうか、本当に子どもだったのね」

「……もう少し、素直になれたら良かったなって、今なら思います」

もしもあの時に戻れるなら、まずは謝罪したい。意地悪なことをしてしまつてごめんなさい、と。もう、色々遅すぎるけど

無意識に暗い表情になる凛に、「大丈夫よ」と奥平は言った。

「何事にも遅すぎるなんてことはないわ。それに昔はともかく、今の籠宮さんその子が見たらきっと、褒めてくれるはずよ」

私が保証するわ、と奥平はウィンクをしたのだった。



「——それじゃあ改めて。乾杯！」